

天皇杯に輝く名茶

そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

8. 赤木原集団茶園開拓の先覚者たち

先月号（5月号）で述べた野田卯太郎翁は、隣町佐賀県嬉野市不動山の出身である。

24歳のとき（明治21年）当時彼杵村宿郷に居を移し、鍛冶職の傍に赤木原に茶の適地を探し求め、茶園開拓を志し、その最初の鋤をここに打ち込んだのであった。

さらに昭和天皇、御即位御大典記念の、茶園を開拓したのが、現在赤木原に広がる県下第一の赤木原集団茶園の始まりである。

時の村長中島榮氏は「郷土の発展は、赤木原開拓の成否にかかわる」と村民に強く呼びかけ、身心を献じてこの大事業に取り組まれたのである。

ここで、村内の小学校、青年学校の実習茶園が開拓に着手し、続いて在郷軍人会・国防婦人会など村内各種団体の開拓が加わり併せて土地の寄進、資金の寄附が数多あり、村民挙げてこの大事業に取り組んだのであった。当時筆者は、小学校高等科在学中であったが、原田長作校長先生が朝礼で「赤木を開拓せねば」といつも訓話されたのを覚えている。当時の開墾はすべて手打開墾で機械類は全くなく、木を切り倒す鋸、大木の根を掘り取るのが大きな労力がかかり、村民一体となった気力がこの大事業をなし得たのであった。

彼杵地帯に古くから茶の伝来したのには、諸説がある。

栄西禅師の平戸伝来説は、しばらくおき彼杵地帯への伝来は現在の嬉野市不動山からの伝来が通説となっているようである。

嬉野町史によると「嬉野は古来産茶を以て現はる。皇紀（神武天皇が中ツ国を平定して奈良檀原で初代の皇位につかれた日を皇紀【神曆】元旦とする歴史上の記日）二千百年（西暦1440年）唐人の船松浦郡平戸に來り嬉野村皿屋谷に於いて陶器を製造し、且つ茶種を栽培して自家の飲用に供せり。明の正徳年中（我後柏原天皇の朝）明人紅令民なる者、南京釜を帶し來り。地を嬉野に相して唐製茶を試み好結果を得たり。後百年慶長年中肥前白石郷の処士、吉村新兵衛なる者あり。当地（不動山）に移住し、山谷を開墾して茶圃となし茶種を栽培して斯業に尽瘁せるあり。全村翕然として之に倣ひ山野丘嶽致る処茶を見えざるなきに至れり（後



赤木原開拓の父 中島榮氏

略)」と記してある。また一つには「皇紀二千百年（1440年）頃唐土ノ船平戸ニ来リ不動山皿屋谷ニ於テ陶器ヲ製造シ且茶樹ヲ栽培シテ自家用ニ供セリ。今ノ皿屋谷コノ陶器アルニヨリ名付ケラレタルモノニシテ今尚^{かま}窯谷ト云ウ所アリ。ココヨリハ古キ焼物ヲ^{かまあと}発見セラル尚窯跡五ヶ所ハ歴然トシテ存ス。其後明ノ正徳年中（我後柏原天皇）紀元ニ一六四年永正年間（1504～1521年）紅令民ト云ヒシ者南京釜（唐釜）ヲ持渡リ、平戸大村等ノ地ヲ見計ヒシモ適當ノ土地ナク遂ニ皿屋谷ニ来リテ試作セシニ良結果ヲ得茲ニ愈々不動山茶（嬉野茶）ノ起源ヲナセリ。其後、後陽成天皇、慶長八年（1603年）ノ生レ、肥前杵島郡白石南郷ノ大庄屋ナリシ吉村新兵衛ナルモノ、皿屋谷ノ山谷ヲ開墾シ、茶樹ヲ栽培シ販路ヲ拓キ斯業ニ儘瘁セリ。此処ニ於テ全村翕然トシテ之ニ^{なら}倣ヒ山野致ル所栽培ヲ見ザル所ナキニ至レリ。」

このように嬉野茶の発祥については確実な資料を欠いているが、遠く永享年間（1429～1441年）から不動山において茶が栽培されたものと察せられる。

『郷村記 彼杵村』には次のように記してある。

「元禄3年（1690年）、川尻藤太夫道中方として藩主に隋従し、江戸勤務の往復中、山城附近（現在京都府下）に茶園あり。種子を購入しようとしたのが、他藩に持出すことを^{とうだゆう}禁じ容易に手に入れることができなかつた。

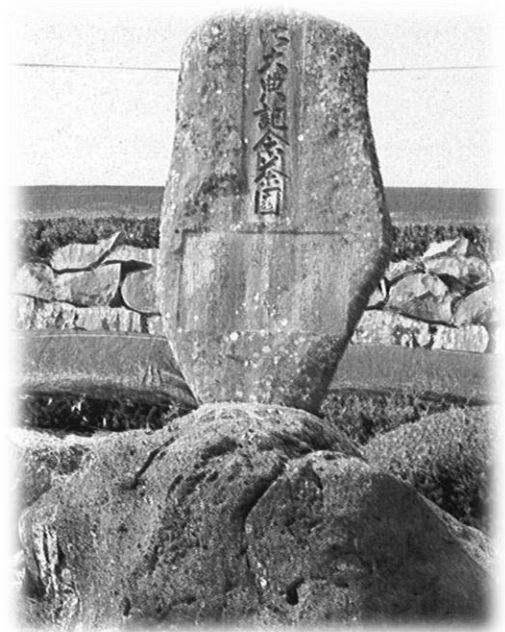
翌、元禄4年（1691年）奈良に一泊二日間滞在したとき種子5合を採集し持帰り、播種し、元禄7年（1694年）には摘葉2貫目を得、藩主に申出て藩特産の一つに加えていただいた。宝永4年（1707年）佐賀藩不動山へも彼杵茶を伝えた」とある。

我が町東彼杵町では、過る昭和45年度頃より、在来茶の品種転換事業が始まり、先進地静岡や京都、奈良の府県を視察し町内の啓発を促し、町が率先して新品種「ヤブキタ」を導入したので現在は町内全茶園新品種「ヤブキタ」に改植されたのである。いつの時代でも農産物の新品種への転換には問題が生ずる一例がある。

以下次号

資料 東彼杵町誌『水と緑と道』、『郷村記 彼杵村』、『嬉野町史（昭和54年3月編纂）』、『平戸市史』など

【平成24年6月15日発行】



御大典記念碑